

中通り

を舞台とした文学

7 山椒大夫

森 鷗外
小説 大正四年（一九一五）

厨子王は関白帥実（おんは）に「お前は誰の子ぢや。何か大切な物を持ってゐるなら、どうぞおに見せてくれい」と言われ「わたくしは陸奥榎正氏（ちちのしんこうまさよし）と云うものゝ子でございませう。父は十二年前に筑紫の安楽寺へ往つた切り、母は其年に生れたわたくしと、三つになる姉とを連れて、岩代の信夫郡に住むことになりました」と、父を尋ねて母子が越後へ行く途中で山椒大夫に捕らえられた物語。「山椒大夫」は大正四年『中央公論』一月号に発表。素材は浄瑠璃本から得た。説経節にも同話があり全国各地に広まる。厨子王の父の岩城判官正氏は福島弁天山の椿館に住んだといわれるが、本宮の菅森館説や、いわき小名浜の住吉館説、三春説など多いが、鷗外の創作で伝説とは別の物語。

13 女坂

円地文子
小説 昭和三年（一九五七）

福島県大書記官・白川行友の妻・倫（とよ）の半生記。前半の舞台は明治一四、五年の福島町の県庁から五、六町離れた「柳小路」にあった官邸で、その小路名はフィクション。暴虐な高官の妻として、夫の妾選びまでさせられ、夫の多くの乱行の後始末をしながら「女の坂」のなかで死んだ明治女の忍従の悲しさを見事に表現している。三島由紀夫は『暗夜行路』に匹敵する作品と賞讃、第一〇回野間文芸賞を受けた。

14 松川裁判

広津和郎
評論 昭和二年（一九五四）

東北本線松川駅付近で何者かの工作のために列車が脱線転覆したのは、昭和二年八月十七日のことであった。当局によって犯人として逮捕された人々の文集『真実は壁を透して』を読んだ広津和郎は、作家的感性によって無実を直感。巖



森 鷗外（もり・おうがい）

文久二・一・一九一

大正一・七・九

本名林太郎、島根県

生。「舞姫」「雁」

「高瀬舟」等多数。

鷗外は明治一五年一

〇月福島の川定、本

宮の水戸屋、若松藤田家

に泊。大正三年飯

坂花水館に泊と一度来県。



田地文字（えんち・ふみこ）

明治三八・一・〇一

昭和六・一・一

一四、東京生、小説

家「ひもじい月日」

「米を奪ふもの」や

現代語訳「源氏物語」

等がある。



広津和郎（ひろつ・かずお）

明治四一・一・二五

昭和四三・九・二

一、東京生、現実に密着しながら、うちに

理想を追求する情熱を秘めた作風が特色。

父の広津柳浪にも福島市を舞台とした小

説「摺止川」がある。

戸川幸夫（とがわ・ゆきお）

明治四五・四・一五

佐賀生、長年毎

日新聞社の記者を勤め、昭和九に「高

安大物語」で直木賞を受賞。わが国には数

すくない動物文学作家として、動物への深

い愛情と知識に根ざした特異な作品を書い

ている。

岩間芳樹（いわま・よしき）

昭和四一・〇・二二

静岡生、小学生

の時に福島市へ転住、旧制福島中学校、社

会系の放送作家として活躍。主な作品は

「わたしは海」「マリコ」「ピロ」を知って

いますか」等。

斎藤利雄（さいとう・としお）

明治三六・二・三〇

昭和四四・八・一

六、伊達郡飯野町生。最初に書いた小説は

鶴田知也との共同執筆による「町工場」

（昭五）昭和初期には絵や小説や随筆を書

いて活躍するが、病氣のため福都士戦後を

迎えた阿武隈川を愛した土着の農民作家

である。

昭和二七年には、「人民文学」（六月号）

に発表し小説「春浅き夜」がモスクワ放

送で放送された。昭和五〇年には福島県立

図書館「斎藤利雄展」が開催されている。



〇松川事件の現場
© 福島民報社



〇橋のあった弁天山と阿武隈川



〇新飯野橋

密な判決文の検討、批判に基づいて被告たちの潔白を主張したのがこの評論で、後に全員無罪判決をもたらす大きな原動力となった。宇野浩二、松本清張、北条秀司、その他の文学者たちも松川事件に係わる著作を発表している。

15 吾妻の白サル神 戸川幸夫

小説 昭和四二年（一九六七）

吾妻山中に一匹の珍しい白いサルがいた。白サルは百匹を越す群のボスとなつて、ついには人里まで荒しまわり、山里の人々は「白サル神」と呼び恐れうやまうが、ついに捕まる時がくる。



16 流離の女 岩間芳樹

小説 昭和五二年（一九七七）

長い風雪に耐えて甘美な果実をつける梨の木のような女であった、たかおばちゃん、会津の生家を借財のために奪われ、福島市へ移住し仲間町から阿武隈川

の向こうの村へ、そして郊外の笹木野の原野に移って苛酷な開墾労働に耐えながら果樹栽培に情熱を燃やす。「たかと家族たちは、明治十六年の春になつても帰らぬ吉本を深刻に案じながらも、新境地

笹木野の一角にとりついて、萱場梨の成長を待つて懸命に働いたのである」。戊辰戦争から福島事件に至る激動の歴史を背景に、吉本嘉一郎への一途な愛を貫き、誠実に生きた一人の女性の生の軌跡が心をうつ。



18 橋のある風景 斎藤利雄

小説 昭和五五年（一九五〇）

第二次世界大戦下に、軍事物資を運ぶために架けられた自宅の前の橋をみつめながら暮らして来た私が、その橋を中心にして、阿武隈の自然のなかで営まれる動物や人間の生活をリアルな眼でとらえ、ひきしまった文体で語っている小説である。モデルになった橋は飯野町に現存している。



21 流離譚・大世紀末サーカス 安岡章太郎 小説

昭和五六年（一九八一）・昭和五九年（一九八四）

「流離譚」は「私の親戚に一軒だけ東北弁の家がある」の書出しではじまる長編で、土佐の安岡家の人々を中心に、幕末から戊辰戦争へ、また明治へと日本の移り変わりを述べた壮大な叙事詩というべき作品である。一族のひとり正熙は、明治二〇年代はじめ、梁川町にきて、その頃珍しい医院を開業して、町民の尊敬を受けるまでになる。昭和五一年から五六年まで「新潮」に掲載された。

「大世紀末サーカス」は飯野町生まれの広八が、一七人の曲芸師をひきつれて、慶応二年から明治二年まで、アメリカ、ヨーロッパを巡業した記録を、広八の日記をもとに記したものである。昭和五八年から五九年まで「朝日ジャーナル」に連載。

なお飯野町史談会では、広八の日記を復刻、昭和五二年に出版している。



22 蛭崎波響の生涯 中村真一郎

小説 平成元年（一九八九）

北海道松前藩家老の波響（名は廣年、明和元々文政九）は有能な政治家、画家、文人であった。この波響の数奇な一生を描いたものである。松前藩は文化四年（一八〇七）から一四年間は梁川町に移



封され、波響も梁川に在住、藩の復帰の運動をする一方、画業に励み、また地方の文人・画人を指導した功績は大きい。昭和六一年々平成年まで「新潮」に連載。



〇蛭崎波響の「鐘植図」(県立美術館)

安岡章太郎 やすおか・しょうたろう
大正九・五・三〇
、高知市生、「悪い仲間」陰気な倫しむで昭和二年芥川賞受賞、同三年には芸術選奨、野間文芸賞を受賞した。



中村真一郎 (なかむら・しんいちろう)
大正七・三・五、東京生、翻訳、小説、評論で西欧文学を紹介。また日本の文学的風土に鑑を入れ、昭和七年には芸術選奨を受賞した。



神山潤 (さかきやま・じゅん)
明治三三・一一・二一、昭和五五・九・九、横浜生。他の著作に「をかしな人たち」「上海戦線」等がある。

東野辺薫 (しつづのべ・かおる)
明治三五・三・九、昭和三七・六・二五、二本松生。太平洋戦下の昭和一九年芥川賞を受けたが、中央文壇へ出る機会を失し、地域に残り執筆活動をした。他に「国土」「人生退場」等の作品がある。

真船豊 (まふね・ゆたか)
明治二五・二・二一、昭和五二・八・三、現在の郡山市湖南町福良生。早稲田大学を中退し全国を放浪。後に劇作家として認められる。「山参道」「運走書」「狐谷」「山鳩」等の戯曲の他、小説「陽気な家族」がある。

<p>28 歴史</p> <p>神山潤 小説 昭和三年(一九三八)</p> <p>「奥羽鎮撫参謀世良修蔵が、福島北町の妓楼金沢屋で暗殺されたのは、慶応四年閏四月三十日の未明である。この事件を契機として奥羽列藩同盟が成立した。」で始まるこの作品は、作者の岳父である二本松藩上佐倉強戦をモデルとした主人公の青年武士片倉新一郎の戊辰戦争の激動期を生き抜く姿と、二本松の霞ヶ城の落城と人々の運命を合せ描いた作品。雑誌『新潮』(昭和一一)連載。新潮社文芸賞を受賞した。</p>	<p>30 和紙</p> <p>東野辺薫 小説 昭和八年(一九四三)</p> <p>「東北本線がほぼ福島県の半ばほどに入つての一小駅安達から東南およそ一里の位置にあるこの上川崎村は、まことに紙の村といつてもよかつた。これをしないのはわずかに数人を出ない資産家か、反対に日備取や馬車挽などに限られている」と「和紙」の舞台の村を描いた。紙すきを副業とした貧しい村にも戦争の暗く悲しい波がひたひたと押しよせる。主人公の友太は、異母弟の物吉が兵隊に召集される時に、彼の身重の愛人としゑを両親を説得して自家に迎え入れた。しかし、この友太にも召集令状が来た。出征前夜に二〇ワットの薄暗い電灯の下で紙を漉く。友太の恋人ユミが「あした行くつてのに、漉いてんの？」といったのに、「んだから漉いてるで」と答える。戦時下の戦死覚悟の離別が切ない作品。</p>	<p>37 紙漉</p> <p>真船豊 戯曲 昭和九年(一九三四)</p> <p>舞台は「東北地方、鉄道から五六里離れたある旧街道に沿うた村のこと」第一幕から第三幕「だるま屋万三郎の家」での出来ごと。欲に目のくらんだ人間模様が描き出されている。「炉端に、おしま(二二)、三</p>
--	---	---



歳)があぐらをかき、独りで焼酎をあふつて」いる。その傍に、衰えた陰気なおかじ婆さん(六七、八歳)がじつと坐っている様子から幕が上がる。登場人物は南洋へ出稼ぎに行き金をつくらうとする万三郎、阿母のおかじ、妹おしま、叔母のおとり、女地主の古町のかか様、伊勢金のおかみ等々などである。身持ちが悪く村を追われた万三郎の叔母おとりが上州で金儲けをして帰ってきた。



「なあおしま、お前だって、荒え世間にもまれて来ただが、ほんに生れ故郷ほど、せいせいすつとこはねえなア？」というのである。

38 大地の朝

諏訪三郎
小説 昭和六年(一九四一)

「白い煙りが、もくもくと、霧の中を走って行った。東北本線の下りである。まだ、朝日の昇らない、稲田や桑畑には、一面の濃い霧がたちこめて、遠い野の涯は、夢のやうに、ぼつと霞んでゐた。その一角から、肩をいからした安達太郎山が、暁の中に、うつすらと姿を匂わしてゐる」と描かれた小説の舞台は、郡山市田村町の一角である。「阿武隈川と云つても、この辺は、ざつと上流で、川幅もせいぜい七、八十米位であった」と描かれ、小作農の青年小川恭介と地主のお嬢さんである古河多美子の直向きな愛



情が展開される。新しい農村の建設を目指す恭介、地主のお嬢さんではなく一人の女性として生きようと努力する多美子を通して、戦前の日本農村社会の経済的自力更正を主題とした作品である。この小説は大衆雑誌「キング」に連載されてベストセラーになった。

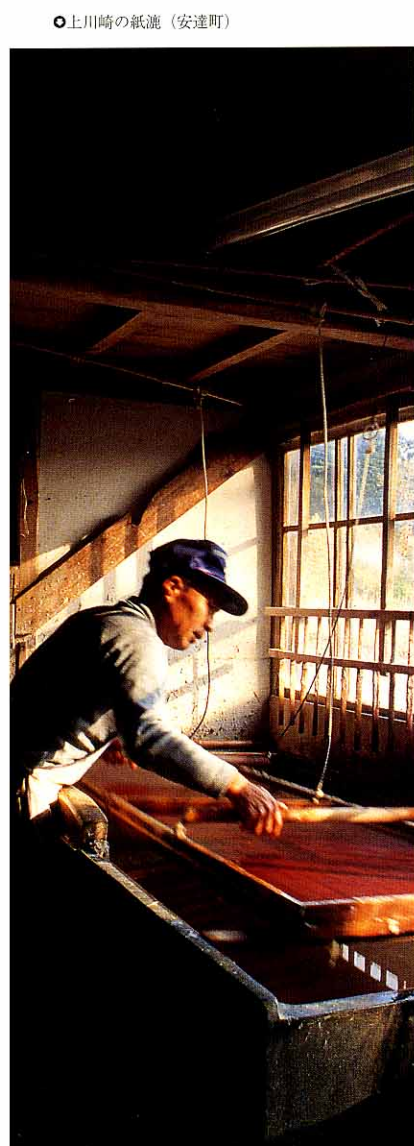
40 子守学校

菅井浩
小説 昭和五年(一九三〇)

作者は「この本は、私の郷里郡山に実在した、子守の小学生だけが学んだ珍しい学校を素材」に描いたと述べる。三部作で「子守学校」、「子守学校の女先生」、「さいなら子守学校」から成る。子守と言うのは明治以来義務教育とされた小学校へ入学できない子供たちで、町の商家等で専ら赤ん坊を背負って奉公する少年少女のことだ。明治末から昭和初期の少年少女たちのために開設されたのが子守学校で、郡山の陣屋に実在した。子供たちは町の国道筋の商家等から陣屋跡(現在は繁華街となる)にあつた学校へ「からかさ通らん小路」(一部は今も現存)を通って行く。児童文学だが近代教育史も描く作品。路傍の石文学賞を受賞。



県内には優れた児童文学が多く、高木敏子「ガラスのうさぎ」、新開ゆり子「ちいさなちいさな三春駒」や最上二郎「マタギ少年記」等がある。また子供向けの娯楽作品としては、郡山生まれの絵物語作家山川物治の「少年ケニヤ」や川内康範の「月光仮面」がある。



○上川崎の紙漉(安達町)

諏訪三郎(すわ・さぶろう)
明治・九・二・三(昭和四九・六・一四、
現在の郡山市湖南町赤津生。東京で「中央
公論」の編集に携わり、後に大衆文学に転
じた。「家」「応援隊」等がある。

菅生 浩(すけい・ひろし)
昭和・三・六・一(郡山生。「菓立つ日
まで」で日本児童文学者協会新人賞。「赤
い果糖」「ボーイフレンドは転校生」「赤
い落し傘」等。

杉森久英(すぎもり・ひさひで)
明治四五・三・二(石川興生。作家島
田清次郎の波瀾の一生を描いた秀作「天才
と狂人の間」で直木賞を受け、伝記文学の
分野で活躍。

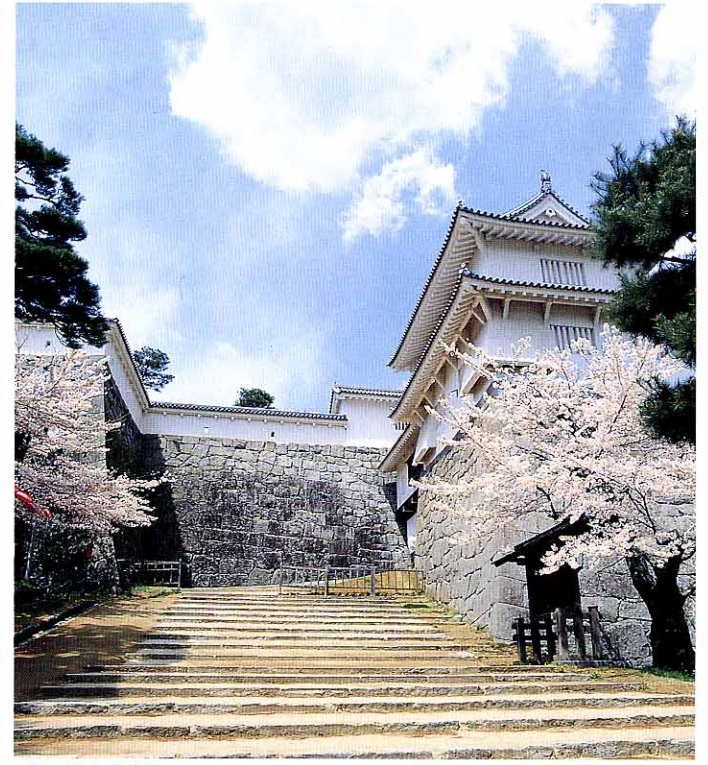


中山義秀(なかやま・ぎしゅう)
明治三三・一〇・五
昭和四四・八・一
九、西白河郡大信村
生。安積中学から早
稲田大学に進み、横
濱デビューは遅かった。小説「厚物吸」で
光利一と同じ下宿
で、文学に志すが文
芥川賞、「七色の花」「羅摩羅桃」等。



舟橋聖一(ふなはし・せいいち)
明治三七・一二・二五(昭和五・一・一
三、東京生。「雪隠人絵図」「花の生涯」等、
独自の恋愛文学の世界を確立した。

松本清張(まつもと・せいちょう)
明治四二・一一・二
一(平成四・八・四
福岡興生。昭和二七
年に「或る小倉日
記」で芥川賞受
賞、その後、歴史小
説などで多くの傑作
を残した。



○観ヶ城(二本松市)

44 大風呂敷 小説 昭和三九(一九六四) 杉森久英

大風呂敷を広げるかのような意表をつく企画力と抜
群の実行力で、明治・大正時代の政界を疾風のごとく
駆け抜けた傑物、後藤新平の伝記小説。青雲の志を抱
いて若き日の新平は生まれ故郷の岩手県水沢から、須
賀川の県立病院に付設された医学部に遊学した。「病
院は、須賀川の北端あたりを、奥州街道からわずかば
かり入った高台にあって、眼下には釈迦堂川を見おろ
す景色のいいところであった」「新平はその身装のみ
すばらしさに反して、色は白く、目の青みがかつた、
精気あふる美男子で、須賀川の子女の血を沸かせた
ことは事実である」。また、本県にかかわりの深い相
馬事件についても、この作品はかなりの紙数を費やし
ている。



○中山義秀の生家(大信村)



○長沼城の碑(長沼町)

「峠に一基の碑が立つてゐる。
三重の台石の上にたち、高さ一問
ばかりのかなり堂々としたもので
ある」。この作品に登場する斑石
高範、茂次郎、平太の三兄弟の一
人、茂次郎を記念した碑である。
碑を建てたのは茂次郎の門弟達で、「茂次郎が朝々旅
人を送って、此處の野石に腰かけ江戸の方を眺めてあ
た、彼の生前の姿を偲んで峠に記念の碑を建てた」の
だ。この事から「碑」の題名が来ている。斑石三兄弟
の辿った人生は激烈であった。山間の小藩(長沼)に
も明治維新の波が寄せ、尊攘派の平太は、兄高範によ
つて隠居所に蟄居させられ発狂、母を殺害。高範は平
太と二時間近くも死闘を続け、弟を斬殺。茂次郎は水
戸天狗党に参加し敗走、峠近くの宿場に住みつき、村
人に剣道を教え旅人の世話をして世を終る。兄高範
は維新後は金融業者になった。歴史は兄弟の運命を翻
弄した。



45 碑 小説 昭和四四年(一九三九) 中山義秀

「和泉式部日記」を枕もとに遺して、維子の叔母伊
勢子は愛人との情痴のもつれから、石川町の猫啼温泉
で自殺した。美しい叔母にაცოგაれていた維子はその
愛人に接近し、自分もまた不倫の愛欲のなかに身を沈
ませてしまう。和泉式部ゆかりの地という伝承のある
猫啼温泉を訪れた維子が、叔母の幻影を視る場面。
「暗い女湯で、湯を浴びる音がする……向うから裸の
女が歩いてきて、それがまざまざとシルエトになつ
た。一瞬その女が、右手の腕に、まっ黒な仔猫を抱い
ているように見えた」。薄幸の佳人のイメージを遠景
に明滅させながら展開する耽美官能的な連作小説「あ
る女の遠景」のなかの一篇。

46 猫と泉の遠景 小説 昭和三八年(一九六三) 舟橋聖一

銀座の一流画廊に画を売込みにきた新人画家・降田
良子は、画廊の注目をあつめる。彼女の制作に秘密を
感じたライバル画廊の支配人は、真相を求めて、良子
の郷里へ向う。そこは東北本線を上野から二時間半、
支線で十五分の町「真野町」(モデルは三春町と石川
町)だった。画商の商算と美術評論家の欺瞞が交錯す
る長編サスペンスである。

48 天才画の女 小説 昭和五三年(一九七八) 松本清張

「和泉式部日記」を枕もとに遺して、維子の叔母伊
勢子は愛人との情痴のもつれから、石川町の猫啼温泉
で自殺した。美しい叔母にაცოგაれていた維子はその
愛人に接近し、自分もまた不倫の愛欲のなかに身を沈
ませてしまう。和泉式部ゆかりの地という伝承のある
猫啼温泉を訪れた維子が、叔母の幻影を視る場面。
「暗い女湯で、湯を浴びる音がする……向うから裸の
女が歩いてきて、それがまざまざとシルエトになつ
た。一瞬その女が、右手の腕に、まっ黒な仔猫を抱い
ているように見えた」。薄幸の佳人のイメージを遠景
に明滅させながら展開する耽美官能的な連作小説「あ
る女の遠景」のなかの一篇。



○三春の町並み